

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが2



アラン

シャナン王子の  
学友。

ベサミ

シャナン王子の世話役。  
人と精霊のハーフ。

カノープス

騎士団の副団長。  
仕事熱心で真面目だが、  
人付き合いが苦手。

シリウス

魔導省の長官。  
その正体は、天界から  
人間界にやってきたエルフ。

クェーサー

騎士団員。団長の第二従者。  
リシェールに従者の仕事を  
教えてくれる。

ゲイル

騎士団員。ミハイルの側近。  
強面だが、おおらかで  
優しい性格。

ミハイル

騎士団員。戦術の天才。  
俺様気質で、周囲の人間を  
よく振り回す。

シャナン

メイユーズ王国の王子。  
体調が悪いと噂されて  
いるのだけど……?

リシェール

乙女ゲーム世界に  
ヒロインのライバルとして  
転生した少女。  
だけどひよんなことから  
悪役ルートの回避に  
成功して……?

ヴィサーク

リシェールの契約精霊。

登場人物  
紹介

1 周目 生麦生米米せっけん

どもどもー。

ムキムキ腹筋男達の中の紅一点。

今日も口うるさい昭和おかん……おっと違った。王都で騎士団副団長様の従者として奔走する、リシエール・メリスですよ。とはいっても、今はいろいろあって、リル・ステイシーと名前を改めているんだけど。

命の恩人である王子のお役に立つべく、社会進出率が低い女の身で出世するのが、私の目標。そのため男装して騎士団にもぐりこんでいる、気の早い六歳児なのです。

ちなみに私には、日本で二十五歳まで生きた前世の記憶がある。つまり、現代日本からファンタジーなこの世界に転生したってこと。

どうしてそのことに気づいたかって？

事のはじまりは約一年半前。私の母が、流行病で亡くなったことがきっかけだった。

もともと、王都の下民街で生まれ育った、平々凡々な私。その時までは、貧しいながらも、母ひとり子ひとりで何とか暮らしていた。

ところが母を亡くしたショックで、秘めていた莫大な魔力が暴走してしまう。そして、『西の猛き獅子』と呼ばれる精霊ヴィサークを呼び出し、あわや大惨事の事態を引き起こしそうになったのだ。私が前世の記憶を取り戻したのは、この時。そりゃあびつくりしましたとも。なんせ、あたりはすわ竜巻かという暴風。おまけに、白くてでっかいホワイトタイガーみたいな精霊が、目の前で暴れまわっていたのだから。

その光景を見て、私は直感した。

「あ、これは乙女ゲームの世界だ」って。

すぐにわかったのは、私が前世でこの乙女ゲームをプレイしたことがあったから。

……というか、前世の私は転生してもゲームの知識やシナリオを忘れないほどゲームをやりこんでいたため、気がつくことができたのだ。

私が転生したのは『恋するパレット』空に描く魔導の王国、略して『恋パレ』という、ダサダサなタイトルのファンタジー系乙女ゲームの世界でありました。

あ、乙女ゲームとは、いわゆる女性向け恋愛シミュレーションゲームのこと。プレイヤーが主人公を操って、好みの男性キャラクターとの恋愛成就を目指すゲームである。

ここは、魔導を使える世界。魔導というのは、魔力を使う技術のことだ。魔法もあるにはあるのだけど、人間が使うことはできない。魔導と魔法は根本から違って、魔法は精霊やエルフだけが使うことのできる力だ。

前世の携帯ゲーム機でプレイしていた時は、画面にタッチペンでペンタクルという図案を描くと、

主人公が魔導を使うことができた。

ゲーム世界に転生した今、ペンタクルをものに刻んだり、魔導具のペンで空中に描くことで、私も魔導を扱える。

ちなみに、魔導を使う大前提として、魔力を持ってなくちゃいけない。

この世界では、人が保有しているもの以外にも、魔法粒子という粒としてそこらじゅうに魔力が散らばっている。

また魔力にはいろいろな属性があって、風や火、土のような自然物が基本となる。

魔力を持っている人は、自分の属性の魔法粒子だけを見たり使ったりすることができるとはいい。ただ、魔力属性が全部で何種類あるかとか、魔力の詳細についてはまだ解明されていないくて、前世でゲームをプレイした私も詳しくは知らない。

特に、自分の能力についてはわからないことばかりだ。

騎士団に入る時に受けた検査では、ほとんどの項目で『測定不能』を叩きだし、属性『不明』な上に魔力量も『測定不能』で、能力値は『未知数』。謎だらけで、騎士団の方々からも変な目で見られてしまい、我ながら気持ち悪いなあと思う。

ともあれ、恋パレの話ですよ。そんなファンタジーな乙女ゲーム世界には、いくつもの筋書きが存在する。

もともと、乙女ゲームには、さまざまな展開や結末があるものだ。

攻略対象の男性キャラクターであるイケメン君達が、主人公に対して抱く好意レベル——好感度。

それが、主人公の選んだ選択肢によって上がった下がり下がり下がりして、ゲームの展開は変わっていく。もちろん、恋パレもそうなんだけど、それだけではない。

恋パレには、私がプレイしたことのない、プロトタイプのある作品があるのだ。その作品——初期の恋パレは、同人ソフトとして少数生産されたもの。

なんでも、一部のプレイヤーから『ヤンデレ矯正ゲーム』と呼ばれる特殊なゲームだったらしい。恋パレは、主人公が名門のセントウルム魔導学園に入学したところからはじまる。

初期の恋パレでは、まずファンタジー世界のイケメンと付き合って、やがてヤンデレ化する彼らの手綱を締め、いかに問題を起こさせずに学園を卒業できるかに主軸が置かれていた。なんとも乙女ゲームの王道をかなりハズれている。

しかも、残酷なエンディングも多かったようで、『絶対に商品化できないゲーム』として名を馳せていたらしい。

ちらつと聞いた話では、主人公の選択ひとつで、男性キャラクター同士に殺し合いに発展することもしばしば。果てには、国全体を巻きこんだ、戦争ENDなんてもも存在したとか。ああ、考えたくもない……

私が今暮らしているのが、初期の恋パレの世界なのか、それとも私の知る商品化された恋パレの世界なのかは、まだわからない。

それが、私の抱える不安要素その一。

さらにしんどいことに、不安要素その二は私の役回りである。私は、イケメン達とウフアハハ

な恋物語を繰り返す主人公ではない。主人公の同級生のお嬢様なのだ。

ゲームの中で、私は伯父のシリウス・イーグに恋をしている。そしてシリウスに愛される主人公に嫉妬して、彼女をいじめたり、恋路を妨害したり——まあ、いわゆるライバル役というか悪役なんです。嫉妬による悪行の末、それを咎められて国を追放される結末や、最悪殺される結末まであった。

……長くなったが、以上が恋パレについての説明である。

さて、記憶を取り戻した当時に話を戻しますか。

魔力を暴走させて、恋パレの世界の情報が頭の中を駆けめぐった私は、焦った。なんせ、ゲームの中では私が精霊を呼び出したせいで、下民街が壊滅状態に陥るから。

私はとにかく必死に心を落ちつかせて、暴走する魔力を制御した。そしてその時、事態を收拾しに現れたのが、リシエールの初恋の相手であるシリウスだった。

そのあと、実は私はメリス侯爵の隠し子だと判明し、父親に引き取られた。だけど強い魔力によって小さな体は弱い、私はほとんど毎日床に臥せることに。しかも、庶子の私は義母に散々いじめられ、ほかの家族や侍女達からも避けられて過ごすこととなった。

私を気遣ってくれるのは、伯父としてお見舞いに来てくれるシリウスだけ。寂しくて仕方がない時に、優しくしてくれた人だもん。そりゃあ、彼を好きになるのは仕方ないよ……と、ゲームの中のリシエールに同情した。

ただ、攻略対象や魔導学園と関わるのは絶対回避したい！

だって、悪役になんてなりたくないし、物騒なイケメンが集まる可能性がある学園なんて、近づきたくもない。できれば侯爵家を出て、そのまま国外へ脱出できたらいいなと思ってた。そうすれば、ゲームのシナリオが進んでたとえ戦争ENDになろうとも、私への被害は少なくて済むかもしれない。

だけど、そんな私の考えを変える出来事が起きた。

このメイユーズ国の王太子であるシャナン・メイユーズが、自らの魔力によって体調を崩した私に、命がけで魔導を施して救ってくれたのだ。

ちなみに、彼もゲームの攻略対象キャラのひとりである。

私を助けたことが原因で王子は倒れ、それを義母に咎められた私は侯爵家を追い出された。そうして、国のはずれの森に捨てられたのだ。

そんなこんなで悪役人生を回避できそうな展開になったのだが、私は王都に戻ることにした。

私を助けてくれたシャナン王子のお役に立ちたいと、思うようになったから。女だし、身分も何もない私だけど、彼に恩返しをしたい。

彼に関われば、悪役として私の身に危険が迫るかもしれない。しかし、その運命から逃げないと決めた。

そのためには、とにかく出世！ 彼のおそばにいられるように、地位を手になくしてはならない。そう決意したあとは、いろんなことがあった。

私が捨てられた森に盗賊として潜伏していた、攻略対象キャラのミハイル・ノッドと出会ったの

が、何より大きかったと思う。彼に魔力の強さを認められ、私は国のはずれから王都に連れてきてもらうことができた。

王都に戻ってからは、ミハイルの側近であるゲイルが私を養子にしてくれて、新しい家族ができた。幸い、私には伝説の精霊を呼び出せるくらいの魔力の資質がある。だから、規定の年齢に達したら、王都にあるケントウルム魔導学園——乙女ゲームの舞台である学園に入学するつもり。

今は、ミハイルの伝で騎士団に所属している。彼に歴史や戦術を学びつつ、騎士団副団長であるカノープス・ブライクに従者として仕える毎日だ。

そうそう、騎士団は女子禁制なので、男装して過ごしている。

この世界で女だてらに国に仕えるというのは、実はとんでもなくハードな人生だ。けれど、どんな手を使っても、私はその場所に上りつめてやろうと思う。

『ぼんやりしてどうしたんだ？ リル』

過去を回想しつつ、雨の多い青月——日本で言うところの六月——には珍しく晴れわたった空を見上げていたら、小型の白いにゃんこみたいないきものがふよふよと浮かびながら言った。

彼は私が呼び出した風の精霊のヴィサーク、通称ヴィサ君だ。

本来の姿は、ちよつと変わった巨大なホワイトタイガーみたいな彼。しかし、その姿でいると私の魔力消費も激しいので、普段は犬や猫、あるいはシーサーに似たこの姿でいることが多い。

私の契約精霊である彼は、基本的に他の人間には見ることも触ることも、そして声を聞くことも

できない。風属性で魔力が強い人にはうつすら見えたり、ヴィサ君の力が強まって巨大化している時には見えたりするのだが。

『あー、うん。ちよつとね』

答えながら、私は仕事中にぼんやりしていた自分に気がついた。

いかんいかん。今は私の主人である副団長のマントの洗濯中だった。

魔導の訓練中に魔力を暴走させ、騎士団を巨大な植物で覆ってしまってから、そろそろ半月。事件を起こしたせいで従者をやめなくてはいけないかと思われたが、副団長とシリウスのおかげで復帰できた。

けれども、従者とは名ばかり。本来従者は主人の仕事を全面的にサポートするものだ。でも子供のように任せてもらえるのは、部屋の片づけや掃除、料理に洗濯等といった小姓こじょうのやる家事全般である。今は城の洗濯場に面した裏庭で、洗濯板片手にマントの汚れと格闘中だ。

他の騎士達についている小姓達は、洗濯物はまとめて城の洗濯場に頼むから、自分では洗わない。しかし、まとめて洗われた洗濯物は仕上がりが粗いし、服がダメになるのが早いのだ。それに気づいて以来、私はこうして自分の手で洗濯している。

短く切った髪を隠すためにふきんをかぶり、粗末なドレスを着た私を、騎士団の従者だと疑う者はいない。

「あんだ、また来てたのかい？」

騎士団の制服を持って頻繁ひんぱんに訪れる私を、洗濯女中達は最初、奇妙なものを見るように遠巻きに

していた。

けれど、最近では私も下働きだと判断したらしく、普通に世間話をするまでになった。

母は私を産む前、貴族のランドリーメイドをしていたらしい。そのためか、私は彼女達に妙な親近感を抱いている。

とはいえ王城では、ランドリーメイドと洗濯女中は同じ洗濯関係の仕事でも、身分が随分ずいぶん違うようだ。ランドリーメイドは中流階級出身の女性が就ける仕事で、魔導石を用いた簡易洗濯機を使い、洗濯物をまとめて洗う。

洗濯機で洗えない、繊細なレースや宝石をあしらったドレスやマントは、平民の洗濯女中の手で洗われている。

「いくら騎士様とはいえ手洗いをお命じになるなんて、あんだも苦労するねえ」

貧相ひんそうな身なりの私に、彼女達も同情気味だ。

どうも、騎士団員に無理やりマントの手洗いを命じられていると思われているらしい。完全なる誤解だが、誤解されていた方が都合がいいので、特にそれを解く努力はしていない。

ついでと言ってはなんだが、私の女性用の下着等を隠れて洗うのにも、この方法は好都合。女性皆無な騎士団では学べない、女としてのあれこれを、私は王城の洗濯女中達から学んでいた。

ここでの私の役回りは、貴族出身の騎士に服を手洗いさせられている、下働きの少女。腰こがを屈めての水仕事はつらいが、私の素性を知らない彼女達との会話は、余計な気を遣つかわなくて済む。

話していると、自然と気持ちがほぐれた。

「こんなどこに出入りしてたら、嫁のもらい手がなくなっちゃうよ」

「臭い洗濯女が来たってねえ！」

棒でばしゃばしゃと服を叩きながらひとり言い、周りの女達が同意するようにゲラゲラと笑った。

洗濯場に入りにするようになって知ったのだが、この世界で洗濯に使われているせっけんは、前世でよく見かけた固形せっけんではない。ジェル状の液体せっけんだ。

どうも原材料に動物性の脂肪を使用しているらしく、これがまた臭い。せっけんと言えはいい匂いというイメージがあった私には、衝撃だった。

前世で読んだ歴史小説に、獣脂に灰汁を混ぜたせっけんが出てきたことがあった。

匂いまでは言及していなかったけど、そのせっけんも臭かったんだろうか？

この世界で入浴の時にせっけんを用いないのは、恐らく匂いが原因だろう。匂いさえなければ、汚れはよく取れるし手荒れもしないから活用したいのに。

そうこうしているうちに副団長のマントを洗い終え、私はお礼を言ってその場をあとにした。

騎士団の寮に戻る前に、人目につかない木陰で着替える。

王城の庭園には植えこみやベンチがたくさんあって、私はいじめっ子の小姓達に追いかけられるたびに、そこに身を隠していた。

着替え終わると、絞って脱水したマントを手に、騎士団の寮への道をつらつらと歩く。

洗濯場で他の洗濯物と一緒にマントを干してこなかったのは、向こうに干すと盗難の恐れがあるからだ。

良家出身の騎士団の男性とお近づきになりたい女性は、当たり前かもしれないが大量にいる。

年かきの洗濯女中達を疑っているのではない。洗濯物を運んできたメイド達が、騎士団の男性と知り合うきっかけにしようと、マントを持ち去ってしまう恐れがあるのだ。

仕方がないので、寮の裏庭に干すのが常。庭師さんにはすでに了解を取つてある。

それにしても、せっけん……せっけんね。

ずっと思っていたのだけど、この世界にある物で、日本の固形せっけんを再現できないだろうか？ 私は前世でおしゃれなせっけんの手作りキットを使ったことを思い出して、考える。

すべてキットの説明書に従っただけだけど、せっけんを作るために必要な基本材料は一応知っている。

まずは精製水。これは問題ない。この世界では酸性雨が降らない。不純物の少ない雨水を蒸留すれば、限りなく精製水に近いものになるはずだ。

次が、油。地球でのメジャーどころだと、オリーブオイルあたりか。美容にいいのはホホバオイルだとか。これは、普段料理に使っているティガー油を使えばいいと思う。ティガーを実際に見たことはないが、どうも植物らしいので問題ない。

動物の脂肪分でも作れるのだが、例のジェル状のせっけんを考えると、固形せっけんは植物油でいきたい。



そして、これが最も重要な材料なのだけれど、この世界では絶対に手に入らない、苛性ソーダ。つまり水酸化ナトリウムだ。

水酸化ナトリウムは自然界には存在しない物質である。水とナトリウムが結びついてるものだから、おそらく食塩水を電気分解すればできるんじゃないかと思う。中学校の理科の実験でやった。しかし発電技術がないこの世界で、その方法は使えない。

魔力における雷の属性は存在するのだろうか？ 雷の精霊でもいれば、もしかしたら作れるかもしれない。

けど、精霊を探すところからはじめるなんて、手間が多すぎて却下だ。

あ、そういえば、水酸化ナトリウムは絶対に素手で触らないでくださいって、実験の前に先生に注意された気がする。ろくな知識もないのに、そんな危険なものは扱いたくない。

考え事をしながら寮の裏庭に向かっていると、私に近づいてくる足音が聞こえた。

「ルイ！」

ルイというのは、私が騎士団に所属する上での偽名だ。私を追い出した侯爵家に気づかれないよう、念のために使っている。

私を呼び止めたのは、他の騎士についている小姓のリグダとディーノだった。

リグダは太つちよ豚鼻で、ディーノはひよろつと吊り目。彼らは昔のアニメにありがちな、いじめっ子のテンプレを忠実に再現した容姿をしている。

そのテンプレ通り、つい先日まで私にあれやこれやの嫌がらせをしゃがんでくださいましたので

すよ。でも、ひよんなことから私がリグダの命を救って以来、どうも私に対する態度が妙なのだ。

例えば、抱えきれないほど大きな花束や、装飾過多のペーパーナイフを贈ってくる。それも直接ではなく、手紙で。

花は好きだけど、一応男として騎士団にいるから、花束を贈られるのは微妙だ。正体がばれたのかと焦ったが、どうもその様子はない。

新手の嫌がらせかと思っただものの、違う気がする。いじめられっこ歴の長い私にも、彼の真意を推し量ることはできなかった。

あるいはこの世界にも花言葉があり、もらった花は『必殺』とか『私はあなたを嫌っています』的な意味合いだったのかもしれない。その発想に辿り着いた時、副団長室に飾っていた花束はずでに枯れていた。

ペーパーナイフは一応刃物だから、私と同じく世間の常識に疎いヴィサ君は、ついに決闘の申しこみかと色めき立った。

私も気になって、こんなものが届いたとゲイルとミハイルに相談したところ、無視していいと言われた。その際、ペーパーナイフは回収されてしまったので、結局リグダの真意は謎のままだ。

「探したぞ！ 一体どこで何をしていた」

リグダの言葉通り、彼らは私を探し回ったのだろう。ゼーはーと荒い息を吐いている。

そんなこと言われても、君達に行き先を言う義理はない。

彼らからの嫌がらせにすっかり慣れたヴィサ君は、退屈そうに空中で伏せをしながらなりゆきで

見守っている。

「なんか用？」

私が冷たく言い放つと、彼らは気まずそうに黙りこんだ。かなりそっけない対応だが、自分をさ  
んざんいじめてきた相手に愛想よく振る舞えるほど、私は人間ができてない。

「……今日は、別れを言いにきた」

「別れ？」

意を決したように口を開いたリグダを見て、私は反射的に臨戦態勢に入った。

また、あれだろ？ お前にはここから出てってもらおう、っってお得意の追い出しでしょ？ いつま  
で同じネタ引きずってんだよ。そろそろスベってることに気づけ。

私が内心で毒づいていると、リグダが今までにない真剣な表情で言葉を続けた。

「……俺達は明日、騎士団を去る。今日はそれをお前に伝えにきたんだ」

吊り目のディーノが隣でうんうんとうなずく。まだ昼前なのに、しおらしい彼らの態度は、夕日  
を背負っているかのような哀愁に満ちている。

あれ？ これはどういう罠だ？

「どうして、それを私に？」

口から出た疑問は、少し皮肉げな響きになってしまった。

彼らが騎士団を出るのが本当だとして、なぜいじめの対象である私に伝える？ しかも、わざわざ  
ぞ探し回ってまで。何か特別な事情があるのだろうか。

私の問いかけに、ふたりは気まずげに黙りこんだ。ふたりで互いの出方をうかがいつつ、足元を  
見たり手を組みかえたりしている。

お前らは廊下に立たされた小学生か。

相手にしてられないと思いいその場を去ろうとすると、進路にリグダが立ち塞がった。

「待ってくれ！ 俺は……」

彼は思いつめた顔をしていた。

刃物を出すんじゃないかと、私はとっさに身構えてしまう。何せ、彼には前科があるのだ。  
それに気づいたのか、リグダは泣きそうな顔をする。

「本当に違うんだ！ 俺はお前に、謝りたいんだよ！」

リグダはそう叫び、ディーノは半泣きになっているリグダの背中をほとんど叩いた。  
どういう超展開だこれは。目を丸くして立ち竦む。

「お前に……ルイに嫉妬してひどいことを言ったり、悪戯したりして、本当にすまなかった。果て  
には、ルイに向かって魔導を使おうとして。あの時、いつも意地悪ばかりしていた俺なんかを、ル  
イは助けてくれた。……ありがとう。ここを出る前にどうしても、伝えておきたかったんだ！」

涙ぐみながらリグダは言った。それを補足するように、ディーノが口を開く。

「あの時、リグダのそばにいたのに俺は何もできなかった。大事な友達なのに。俺も、ルイには本  
当に感謝しているんだ。リグダを助けてくれてありがとう」

そう言ってディーノは頭を下げた。

あまりにも誠実な謝罪に、私は言葉を失う。  
今まで謝ることは多々あれど、私自身が頭を下げられた記憶は多くない。……というか、ないと  
思う。

謝罪というのは、受ける側にも微妙な気まずさを感じさせるものなんだな。どうしていいかわか  
らず、先ほどまでの彼らのように、私は視線を足元に落とした。

「俺達は……多分もうここには戻ってこれない。本当にすまなかった。最後に伝えられて、よ  
かった」

リグダが満足そうな顔で去ろうとする。

気づけば、私は彼らを呼び止めていた。

「待って！」

思わず上げた声に、ふたりが振り返る。

先ほどまでは、小憎らしいガキにしか見えなかったふたりがやけに純真な目をしていた。

私はもう少しだけ話が聞きたくて、彼らを裏庭にある人目につかないベンチに誘った。

しかしベンチに座った方がいいが、何から話していいかわからない。なんせ、今まで完全に敵対関  
係にあった相手だ。それ以上に、精神年齢がアラサーなのに、十歳前後の子供と同じ目線で語るの  
はつらい。

沈黙に耐えかね、私はふたりがここを去る理由を尋ねた。

そして返ってきたのは、想像もしない答えだった。

騎士団には、主に貴族の次男三男が集まっている。もちろん、小姓にも相応の家柄が要求される。  
小姓の中のリーダー格なのだから、私はつきりふたりも良家の子息だと思っていた。しかし実は、  
ふたりの実家は貴族ではないのだという。

リグダは、王宮にも商品を納めている最大手のせつけん工場の次男。ディーノはリグダの家の工  
房に獣脂じゅうじを売っている巨大農場の跡取りなのだそうだ。

金銭的にはかなり豊かなのだろうが、商売をしている家は総じて平民。身分は高くない。

幼い頃から親しかったリグダとディーノ。ふたりは、将来は今以上に家業を盛り上げていこうと  
誓っていた。

しかし、彼らの父親は、王宮との伝つてを作るため、大枚を叩いてふたりを騎士団の小姓にしたのだ。  
ふたりとも、騎士団に入った当初は相応いじめられたという。けれども、相手は貴族の子ばかり  
刃向うことは絶対に許されなかった。

それが、貴族と平民の間にある絶対的な身分の差なのだ。

そして彼らは、自分達をいじめていた小姓達が年齢を理由に小姓を辞したのを機に、ターゲット  
を探し、平民出身の私に狙いをつけた。そして年下の小姓達に舐められないように、率先していじ  
めをはじめたらしい。

前半は同情の余地がある話だが、後半に関してはまったくくないな。

ただ、彼は話しながら申し訳なさそうな顔をしていたので、もう水に流してやることにする。

私のそばで丸くなっていたヴィサ君は、くああと欠伸あくびした。

さて、彼らがどうして小姓をやめるのかという話だ。彼らは今まで、実家の経済力で小姓達のリーダーとして君臨していられた。だが、先日実家から持ち出した魔導具で魔力を暴走させたため、咎めを受けたらしい。さらには実家の業績が不振で、ふたりとも実家に戻るようになったそうだ。

出戻りなら、哀愁が漂っているのも当然か。

話によれば、彼らはそれぞれの父親から罰を受けるのは確実で、最悪縁を切られかねないらしい。そんなの私には関係ないと思うものの、真剣に謝罪されたあとでは、なんとなく「はい、そうですか」と言っただけの気分にはなれない。

「——ちよっと聞きたいんだけど」

気づけば、ついそう言っていた。やめておけばいいのに。

ヴィサ君も、そんな顔で私を見ている。

わかっているけど、思いついたことは実行せずにはいられないのが、私の性分なのだ。

私の口から溢れ出る言葉を、彼らは目を白黒させながら聞いていた。

それから数日後、私のもとに小包が届いた。封にはディーノの署名がある。

仕事を終えた就寝前、喜び勇んで私はその小包を開けた。

中には、数種類の穀物が小分けにされて入っていた。この世界の穀物を集めるよう、私は、ディーノに頼んでいたのだ。

私は穀物をひとつひとつ手のひらにのせて確認する。

普段、小麦粉代わりにシュピカの粉を使っているが、初めてシュピカの粒を見た。味と同様、形も小麦にそっくりだ。ただし、もみ殻にストライプの模様がついていることを除けば、だが。

もうひとつ気になったのは、シュピルという名前の穀物だ。名前が似ているだけあって、形はシュピカと瓜二つ。ただし、模様がボーダーなので、簡単にシュピカと見分けられる。粒がシュピカよりひとまわり大きいから、大麦かもね。

そして、最後に開けた袋から、私の望んでいた粒が溢れ出た。私は思わず、夜だということも忘れ、喜びの奇声を発してしまった。

声を聞きつけて何事かと部屋に飛びこんできた副団長様には、何度も頭を下げてお引き取りいただきましてとさ。

「やけに機嫌がいいな」

翌日、鼻歌まじりに副団長の私室を掃除していたら、帰ってきた副団長にそう言われてしまった。いきなりの出現だったから、驚いて跳び上がる。

いつも副団長の帰りをいち早く知らせしてくれるヴィサ君は、私が振り回していたお手製ハタキに、夢中でじゃれていた。この猫属性め。

「し、しっつれいしました！」

ごまかすように、私は部屋の外に出る。

上機嫌を隠しておけないのは、前世からの私の性格だ。

仕事が終わったあと、小包に目的の植物があった旨を伝えてお礼をすべく、私はディーノとリグダ宛に手紙を書く。

手紙には、あるものを作る方法を図解つきで詳しくしたためた。そのせいで、書き終わった時にはやけに分厚くなってしまう。それを城の外の業者に出してもらうために騎士団の事務局に行ったら、熱烈なラブレターだなと笑われたりした。果てしなく不名誉だ。

半月後の紫月——七月のはじめ。折り返して届けられた手紙に書かれていたのは、芳しくない途中経過。私が直接ふたりのものに行行って作り方を教えられればいいのだが、小姓の身ではそういうわけにもいかない。

ふたりの健闘を祈りつつ、一緒に届いた大きな麻袋の中身を確認する。そこに入っていたある穀物を見て、私のテンションはマックスに跳ね上がった。

ディーノとリグダ。君達の友情に乾杯だ。

私はさっそく、お馴染みの寮の厨房にその袋を持ちこんだ。

そして「なんじゃこりゃ」と麻袋の中身を丸くした料理長を尻目に、ある作業に没頭したのだった。余談だが、料理長は髭を生やしたそこそこのイケメンで、なおかつ独身である。厨房に入りする私を煙たがらず、とても親切にしてくれる人だ。

料理長以外の厨房の人達にもだいいふ訳しげな目で見られたが、今は全然気にならない。

ふふん。これに興味を持ってないようでは、まだまだ君達も尻が青いな。

ひとり悦に入りつつ、冷たい水と穀物を入れたボウルに手をさし入れ、ひたすら動かした。

さらに二月のち、橙月——九月を迎えたある日。

私のもとに届いたのは、待望の知らせと私が頼んでいたものの完成品だった。

まさかこんなに早く完成するなんて、思っていなかった。

リグダとディーノはすぐくがんばってくれたのだろう。私は彼らに心から感謝した。

「今日ほどびきりの贈り物があるよ！」

その日の夜、授業のために向かったミハイルの部屋で、私は部屋に入ると同時に叫び、ポケットから小さな陶器の容器を取り出した。

ふたを開けて手のひらに出したそれは、素材の色がそのまま出た、茶色の塊。ぼろぼろと崩れやすいので、容器に入れてあるのだ。

「なんだそれは……」

意気揚々とした私の態度とは不釣り合いな、みずばらしい見た目だからだろう——ゲイルとミハイルは肩透かしをくらったような表情を浮かべた。

「新作のお菓子か？ 食欲を削ぐ見た目だな」

「バカ！ リルの作ったものなら、俺はなんだって食べるぞ！」

期待が外れたからか不愛想なミハイルと、やけに熱く彼を罵倒するゲイルお義父さん。

いやいや、ふたりともこれは食べ物じゃないですよ。

「これはねー、固形せっけんだよ！」

私の頭の中では、じゃじゃーんと効果音が鳴っている。どうだ、驚いたかー！

「固形……」

「せっけん？」

かなり大きなリアクションを期待していたのに、ふたりの反応は相変わらずそっけない。あまりの手ごたえのなさに、教える相手を間違えたかどっかりする。

いいさ。これがどれほど画期的な発明か、きっちり説明しようじゃないか。——まあ、私が考へ出したわけではないが。

「せっけんというのは、あれだろ？ 洗濯に使う、どろどろの」

ミハイルは不思議そうに言う。

「でも、これは臭くないじゃないか」

ゲイルも訝しげだ。

「そう。でもこれは、今までのどろどろのせっけんとは違う。あれは動物の脂肪を使って作っていたけど、これの材料は水とネイの糠とバフの花粉なの」

じゃじゃーん！ 私がリグダとディーノに製造をお願いしたのは、米糠せっけんでーす！

バフの花粉は、私が普段ベーキングパウダーとして使用している粉。つまりは重曹だ。

そして私が何よりもアピールしたいのは、米糠！

なんと、米を発見したのだ。ガラパゴスで進化論に気づいたダーウィンも、こんな興奮を味わったに違いない。あるいは落ちるリングから引力の存在を導き出したニュートンでもいい。元日本人の私にとって、米の発見はそれぐらい大きな出来事だ。自叙伝を書く時には年表に載せたいぐらい

である。

二月半ほど前、実家に帰るリグダとディーノに、私はあるお願いをした。

ディーノには、穀物を集めて私に送ること。

そして目的の穀物が見つかったら、リグダにはそれを使ってせっけんを作ってほしいと頼んだ。

はじめは狐に抓まれたような顔をしていたふたりに、私はこの世界の生活を変えるものを作れるかもしれないと熱く語った。

すると、ふたりは絶対に実行すると約束して、騎士団を去っていった。

ここきてからずっと険悪な関係だったが、最後の最後に打ち解けられて、正直嬉しい。

それはともかく、私が探していたのは米だ。米がなければその副産物である米糠は得られないし、当然、米糠せっけんも作れない。

だから、ディーノが送ってくれた多数の穀物からそれを見つけ出した時は、思わず歓喜で叫んでしまった。本当に、ディーノの素早い仕事っぷりは見事だった。

ちなみに、その植物の名前はネイ。だから、こちらの世界では米糠と言わず、ネイの糠と呼ぶ。

稲、イネ——ネイ。まんまか！

私は心の中で、久々にゲーム製作スタッフにツッコんだ。

ネイという植物は、どうやら古くから存在していたらしい。しかし病気に弱い上、育てるのに大量の水を必要とするため、栽培のコストが大きい。だから、あまり重要視されず、育てている農家は少ないという。

道理で、村でも王都でも馴染みがなく、食べられていないわけだ。

その話を聞き、よく見つけられたなあと感心した。

なんでも、ディーノの実家の農園付近に、広大な湖があるらしい。水が豊富にあるから、ほそぼそとネイを育てているのだとか。というのも、ネイにはマニアが存在していて、彼らに高値で売りつけたり、珍味目当ての貴族にすすめたりするようなのだ。

米が高値で取引されているとの情報にがっかりだが、精米したそれを大量に送ってくれたディーノにはひたすら感謝である。

私はそれが届いた日、あまりの嬉しさに寮の厨房で米を炊き、おにぎりパーティーを開催してしまった。厨房の人はおにぎりを食べてくれず、喜びは誰とも分かち合えずにひとりきりだったが、それは別に気にしていない。むしろ大量のおにぎりを独り占めできて大満足である。本当だ。別に、強がってなんかいない。

今世初めての白米はおいしかったけど、やはりおにぎりパーティーには海苔が必要だと思う。そのうち、平民街の市場へ行つて、海藻類を扱う屋台がないか探そう。あるいは乾物屋だ。

それはともかく、あの日ふたりの実家の職業を聞いた時、直前までせっけんについて考えていた私の脳裏に浮かんだのは、小学生の夏休みに提出した自由研究だった。

危険な水酸化ナトリウムを使用しないせっけん作り。それは米糠と重曹を煮立てて作る、自然派せっけんだった。何度も失敗しながら、祖母と一緒にフライパンの中の材料を木べらでかき回したっけ。できあがったせっけんは、泡立ちが悪かったし見た目もいびつだった。でも、これを使うと肌

が綺麗になるのよって祖母が喜んでた。

おばあちゃん……ぐすん。

回想で里心がつきそうになり、あわてて思考を軌道修正する。余計なことまで考えてしまうのは、私の悪い癖だ。

とにかく、お米を食べる習慣がないこの国では、不可能かと思われた米糠せっけんづくりだが、ディーノとリグダのがんばりによって成し遂げられた。

これさえあれば、臭い液体せっけんを使わなくて済む。おまけに、美容にうるさい貴族にもウケること請け合いだ。リグダとディーノの実家も、きつと立て直せるだろう。

私はミハイルとゲイルにそのことを説明した。

そして、ネイの実物がなければわかりづらいかなと思ひ、用意してあったおにぎりを取り出す。これはもちろん、ポケットにしまっていたわけではない。いつも茶菓子を持つてくる時と同様、お皿にふたをかぶせてカートにのせてきたのだ。

お皿を差し出すと、ふたりはおずおずとおにぎりを取り、食べはじめた。

「これは……うまいな」

「むぐ、もちもちしてるんだな……。食感が慣れなくて気になるが、中の具と合っているし、食いがたえがある」

中には、甘辛く煮たお肉を入れている。梅干しも鮭もツナもまだ見つけていないので、ふたりの口に合いそうな具を追求した結果だ。おにぎりがふたりに好評で、私は内心ほっとしていた。



自分がおいしいと感じるものに同意してもらえるのは嬉しい。親しい間柄であれば、なおさら。おにぎりは私の故郷の味だ。褒めてもらえるのは、嬉しさだけじゃなく面映ゆさもあった。

それに米さえあれば、チャーハンや雑炊も作れる。もつともちもちした品種があれば、おもちゃっっておこわだって作れるのになあ。

「おにぎりの材料の穀物はネイって名前だね。調理しなければ長期保存が可能だし、水で炊くだけで食べられるから夜宮の時の食料にもいいよ」

あまりの嬉しさに、なけなしの米知識を引っ張り出して、私はネイをプレゼンした。

「保存食か……ううむ」

戦術オタクのミハイルが、興味深そうにツヤツヤ光るネイに見入っていた。

翌日、リグダから送られてきたせっけんを洗濯女中達にプレゼントした。彼女達には、是非とも液体せっけんの悪臭と戦う仕事生活から、脱してもらいたかったのだ。固形せっけんのプレゼントは、それはそれは喜んでもらえた。

後日聞くと、私のもくろみに反して入浴時に使っているらしいが、まあいいか。

それから、私はリグダとディーノとの手紙のやり取りをずっと続けた。

彼らは実家で心を入れ替えて家業に取り組んでいる。米糠せっけんの発明で、彼らに特大の雷を落とした父親達の態度も、多少は軟化傾向にあるそうだ。

米糠せっけんは、のちに貴婦人の間で爆発的にヒットする。それにもなつて米糠の需要が高ま



り、国中の水が豊かな村で稲作が行われることに。供給が安定するとネイの値段も下がって、精米された実は安価で市場に出回りはじめるのだった。

気軽にお米が食べられて、私も幸せになった——というのは、また別のお話である。

\* ❖ \*

「……どうにかならんのか？」

静かな部屋、仄暗い闇の中に年老いた男——メイユーズ国王の声が響く。

彼の声は弱り果て、今にも泣きだしそうだ。

「こればかりは、私の手に負えん」

シリウスは言う。

「賢者たるエルフの力をもつてしてもか？」

どう答えれば、王は納得するのだろうか。シリウスにはわからず、結局いつも同じことを言う羽目になる。今まで、何度も繰り返してきた問答を、ふたりは今日も繰り返す。

一年半前、この国の王子であるシャナンは、禁じられた魔導を行ったせいで倒れた。それは自身の魔力の強さに苦しむリルを救うための行動だったが、国を継ぐ者として浅はかではなかったとは言えないだろう。負担を強いられた王子の体は、快復こそすれ、意識が戻らない。

「失った体力を補うためにただ魔力を注ぐことならば、できる。しかしそれでは……」

「『王子は人ではなくなる』、か」

肩を落とした王は、普段は家臣に見せない父親の顔をしている。

王子が目覚めなくなつてから、彼はめつきり老けこんでしまった。もともと年齢よりも若く見えただけに、その変わりようは周りの人々を痛ましい気持ちにさせる。

シリウスは人間と長く暮らしているから、他のエルフと比べたら彼らの感情の機微をよく理解している。とはいえ、不老であるシリウスは、人の優さに慣れすぎていた。

エルフであるシリウスが、王の心労に共感できるとは言いがたい。

「王子は眠っているのだ。体に異常はない。ただ目を覚ます体力が不足しているだけであるゆえ、治すという話ではない。対処法もないのだ。こればかりは時を待つしかない」

何度も繰り返した言葉を、シリウスは今宵も辛抱強く王に伝えた。王はわかっていると言うようにため息をつき、傍らのベッドで横になる王子の手を握った。

彼の手は温かく、寝顔は安らかだ。朝が来れば目覚めて、利発な笑顔を見せてくれると、夢想してしまうほどに。

シリウスは音を立てずにそっと部屋を出た。そして自分の執務室に戻り、再び机に向かう。

彼の世話役であるユーガンは帰宅していた。

外部からの空気振動が伝わらないように術を施した部屋は、人間の世界らしからぬ静かさだ。

「……いつまでついてくる気だ？」

『そつちこそ、もう無視はやめか？』

シリウスが問うと、空中で退屈そうに伏せをしていた犬が、顔を上げた。  
いや、こいつは断じて犬ではない。犬はもっと控えめで、従順な動物だ。

「いい加減、文句を言いくるるのはやめろ。リルのところに戻って、ずっとそばにいるんだ。彼女を守ると言ったのは自分だろう」

ため息をついて、シリウスは吐き捨てる。

『いいのかそんな態度で？ 王子のこと、リルに言うぞ』

なんて憎まれ口だろう。精霊——ヴィサークを小さな瓶に詰めこんで、海に流してやりたい。

シリウスはその様子を想像し、湧き上がる憤りをやり過ごした。

「やめろ。リルが傷つくだけだ」

厳しい声で答えたシリウスに、ヴィサークは鼻を鳴らす。

『お前がやけに簡単にリルを引き取ることを諦めたから、おかしいと思ったんだ。裏にはこういう事情があったわけか』

凶星を指されて、シリウスは黙りこんだ。

『魔法省で身柄を預ければ、リルはいずれ、王子のために力を求める王家に目をつけられるかもしれない。騎士団の従者に留めて、リルを隠したつもりかよ。だが、もしリルにこれが知られたらどうなる？ あの子は自分を責めるだろう』

常でない真剣な口調で、ヴィサークはシリウスの痛いところを責め立てる。

「言うな。それは私も本意ではない」

シリウスは苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

リルのことを思うなら、自分の力を無理やり注ぎこんででも、王子を目覚めさせるべきなのかもしれない。でなければ、リルは自分を責めるだろう。

しかしそんなことをすれば、王子は人ではなくなる。エルフに近い『何か』になってしまう。それはもう、以前の王子ではない。

シリウスは過去、人間に力を流しこんだ時の苦い経験から、処置を施すことをためらっていた。「お前に、何か策があるとでもいうのか？」

もしやと思い聞いてみたが、返ってきたのはそっけない声だった。

『エルフにも治せないのに、精霊の手に負えるはずがないだろう。俺は心配なのさ。もちろん、リルがな』

精霊はエルフに比べ、感情が豊かだ。そのため人々には慈悲のある存在だと思われがちだが、彼らは無邪気な力の塊にすぎない。

自分の気に入ったもの以外、どうなってもかまわないと思っっている、実に残酷ないきものだ。目の前に苦しむ人間がいたとしても、関心がない者であれば、助けようとは思わない。

さらには、人の中に昔『精霊使い』という厄介な存在がいたことから、精霊達は人間をよく思っていない。精霊使い達は、精霊を強引に使役し、虐げていたからだ。

「リルならば、もしかしたら……」

考えないようにしてきた可能性を、シリウスはついこぼしてしまった。

『治せるかもしれないな。しかし、ただでは済まない。多くの代償を必要とするだろう。それをリルにやらせる気か?』

「まさか」

冗談のような口ぶりで話しつつも強い眼差しを向けてくる獣を、シリウスは睨み返した。

リルにそんなことをさせるはずがない。それこそ、何に代えても守ろうと思う、唯一の存在だ。

たとえこの国が滅びようとも、それは違えない。

「力は尽くしている。お前は何も知らないふりをしている。もしリルに知られそうになったら、お得意のかわいい魔法でも使おうんだな」

シリウスの言葉に、ヴィサークは毛を逆立てた。

『お前がこのくだらない術を解けば、今すぐこの城を吹き飛ばしてやるさ!』

シリウスはそんなヴィサークを見つめながら、エルフと精霊は人間とまったく違うものなのだとつくづく思った。

エルフは感情が少なく、ありあまる力と英知を持つ。しかし、新しいものを生み出すことはできない。

精霊は感情しかない。思慮することは苦手で、心地よい方に流れていく、実体がない魔力だけの存在だ。

そして人間は、他に比べて圧倒的に非力だが、感情と理性をあわせ持つ。さらには、様々なものを生み出す想像力を持っている。

もしかしたら、その本質は一番神に近いのかもしれない――

『無視すんな!』

精霊の叫びに、シリウスは我に返った。

――今自分は、何を考えていた?

反応が鈍いシリウスに、ヴィサークは語気を強める。

『とにかく、リルは俺が守る。お前も絶対、リルに王子のことを言うなよ』

「言われずとも」

返事をする、精霊は窓から出ていった。ヴィサークはいつも、突然来ては怒鳴って去っていく。ようやく行ったかと思いき、シリウスは窓を閉めた。

あれは以前、ああいう性格ではなかった。シリウスの知っていたヴィサークは、風の精霊らしく自由を愛していた。かつては何ものにも執着しない、孤高の精霊だったのだ。やはり契約精霊になると、変わるものなのかもしれない。

その彼がリルを守るとあれほど張りきるのであれば、心強い。

しかし、シリウスにとっては何より腹立たしさと妬ましさの先に立った。

本当は、撫でられるのも褒められるのも、飼い犬である私の役目だったのに!

シリウスの前世は、リルに飼われていた犬だった。その記憶は、彼女への思慕を高めてやまない。感情がないという割に欲望まみれの自分を持ってあましながら、シリウスは仕事に戻った。

自慢ではないがわたくし、前世ではそろばん検定や電卓検定、簿記検定で一級を取得。ついでに、数検に英検、漢検、秘書検定、販売士検定やワープロ検定、日商P C検定まで網羅していた。普通自動車免許は、通勤時にフル活用だった。

どれもさして難しくはないが、履歴書の欄を埋めるのに一役買ってくれた検定達。

検定オタクだったのではなく、学生時代と、失業期間中にハローワークの職業訓練に通って取得したのだ。大半は日常生活の役に立たないが、とりあえず計算とお茶出しは得意である。

そんな地味スキル達が、まさか乙女ゲーム世界で役立つ日がこようとは。

橙月——九月後半のある日、私は主人である副団長に申し出た。

「騎士団での事務仕事を手伝いたい？」

以前、副団長は膨大な事務仕事を抱えているのだと聞いた。それから、ずっと考えていたことだ。なんでも、騎士団の事務方でトップを務める主計官が寝込んで、彼の仕事が副団長にまわってきているのだという。

前世で事務の仕事をしていたから、副団長を手伝えるかもしれない。紫月——七月頃から仕事が減っていたようだったが、橙月に入って、再び副団長は忙しくなっているみたいだ。お仕事を手

伝い、彼のお役に立つ絶好のチャンスである。

いつもより少し眉間に皺が寄った程度だけど、訝しげな顔をした副団長。私はできるだけ不安そうな顔で彼を見上げた。

「はい。私が巨大化させたテリシアの木の話をシリウス様にうかがった際、私が闇の精霊使いに狙われているのではないかとおっしゃってましたよね。来月は、闇の属性が強くなる黒月です。昼間に寮にひとりで残っていることに、不安を感じます。邪魔はしませんから、本部のすみにも置いていただけたらと思ひまして……」

か弱い子供を演じてみる。まあ、実際私はか弱い子供なんだけれど。

副団長は考えこむような顔を見せた。彼は理知的な頭で、私の提案を押し量っているんだろう。そして決断は速かった。

「わかった。寮の警備も決して甘くはないが、不安ならば同行を許そう。ただし決して邪魔をせず、勝手に出歩かないように」

「はい！ ありがとうございます、カノープス様！」

私はハキハキと返事をして満面の笑みを見せた。営業スマイルは大得意だ。

翌日、朝の家事を一通り終えて騎士団本部の副団長の部屋に行くと、副団長にひとりの青年を紹介された。

「彼は団長の第二従者で、クエーサー・アドラスティア。彼に仕事を教わるように」

副団長の隣に立つのは、平凡な外見の青年だった。なんだか仰々しい名前なのに小柄な東洋人風の見た目で、少年っぽさがある。でも彼が困ったように笑うと、目尻のしわがしっかりと年齢を感じさせた。

貴族には美形が多くて平凡な外見が逆に珍しいので、彼の容姿にほっとさせられる。

「君が噂の副団長の従者君だね。これから一緒になる機会も多いと思うけれど、どうぞよろしく」「こちらこそ、よろしくお願いします」

敬礼されたので、私もそれに応える。私達のやり取りを確認すると、副団長はあっさりといなくなってしまう。

どうも、私につきつきりで仕事を教えることも放っておくこともできないから、別に教育係をつけることにしよう。

「お手を煩わせてしまい、申し訳ありません、アドラストイア様」

私がそう言って頭を下げると、彼は恐縮した顔になる。

「いやいや、団長の従者と言っても第二だから補佐みたいなものだし、家格もそんなに高くないんだ。だから、硬くならないでくれよ。同僚としてよろしく頼む。呼び方もクエーサーでいいよ」

「でも、私は新参者です」

「いいんだ。むしろ、君が来てくれれば人手が増えて助かるよ。カノープス様は今まで従者を持つたことのないお方だから、混乱することもあると思うけれど、がんばってね」

「はい！ よろしくお願いいたします」

新入社員の心得として、とりあえずはき返事をする。久しぶりに家事以外の仕事ができるので、私はワクワクしていた。いや、別に家事が嫌いなわけではないんだが。

たまには机に向かって仕事したい時だつてあるんですよ、人間。

前世の私はパソコンの見すぎでかなりのドライアイだったけど、今世ではディスプレイがないと思うとちよつと寂しかった。

「まず覚えてもらおう仕事は、カノープス様宛の手紙や荷物の仕分けだよ」

そう言って連れてこられたのは、副団長の部屋のある従者の控え室。

なぜ副団長宛のものがここに？ と疑問を持つよりも前に、四畳半ほどの空間を埋めつくす手紙や小包の山に、私は目を丸くする。

言葉も出ない私の反応を見て、クエーサーは困り顔で笑った。

「驚いたろう？ これらはすべてカノープス様宛の手紙なんだけれど、手つかずになっているんだ。そのうちに溜まってきてしまつて……あまりにも量が多いから、この部屋にまとめてある」

「でも、中に急ぎの手紙とかあつたら、大変ですよね？」

「いや、急ぎの知らせや優先順位が高いものは、ここにはない。届いた時点で僕と団長の第一従者がざつと仕分けてカノープス様にお渡ししているんだよ。この部屋にあるのは、カノープス様を慕う令嬢や、繋がりを作りたいその親達からの手紙が主かな。君の仕事は手紙を差出人別に仕分けして、内容にざつと目を通すこと。そして、重要と思われるものだけ書類にまとめてほしい」

「え、読んじやっていいんですか？」

「カノープス様から許可されているよ。たださすがに、僕達もそこまでは手が回らなくてね」  
クエーサーは、一層困ったように笑う。

その顔から、私は悟ってしまった。

副団長は、特に必要のない仕事をわざわざ見つけてきて、私に割り振ったのだろう。『仕事をしている』という名目を、与えるために。

これで私は気が済んで満足。副団長も私に煩わされずに大満足……

つてなるかボケエ！

呆れを通り越して、私は俄然燃えてきた。

副団長がそのつもりなら、こつちだつてやつてやるうじやないか！

山となった手紙達を、見事に仕分けちゃいますよ！

黙りこむ私を見て、仕事量に啞然としていていると思つたのだろう。クエーサーは私の肩にポンと手を置き、「無理しないで、自分のペースで進めてくれてかまわないからね」と言った。

その時、いつもは率先して悪態をつくヴィサ君が珍しく何も言わなかった。

「これがノストラード子爵家で、こつちが……またルマンド侯爵家！」

私はまず、荷物はあと回しにして、山積みの手紙に取りかかる。

現在、差出人別に仕分け中だ。

早くも付き合つてられないと判断したのか、ヴィサ君は姿を消した。

それも当然。だつて一日で終わる量では到底ないのだ。さらに、仕分けたそばから手紙がどんどん届くので、なかなか終わりが見えない。

気が遠くなりかけると、私は心の中で会社の歯車ですよーと念じた。

集中して進めると、差出人ごとの簡単な仕分けはなんとか三日で終了。次々届く手紙も、差出人は大体同じなので、慣れてしまえばすぐできる。

四日目からは、手紙の内容の確認をはじめた。

この中に魔導がかかったものはないそうなので、遠慮なく封を切り斜め読みしていく。

最初は貴族独特の迂遠な言い回しや、複雑な人間関係のせいで内容が理解できずに苦労した。でも、山の半分を切り崩した頃には差出人側の事情がわかってきて、効率が上がった。

私はガンガン手紙に目を通し、重要と思われる事項をメモした。

差出人別に読んでいくと、今の貴族社会の情勢がうかがい知れて大変面白かった。例えば、特定の人物を異常に意識していたり、自分が悪く思っている人を毎回遠まわしに扱き下ろしていたり。

令嬢は他の令嬢の足を引っ張り、その親達もまた然り。

普通、自分宛の手紙に他人の悪口を書いてくる人には、好印象なんて抱けないと思うんだけどなあ。彼女達はそう考えないらしい。

私は手紙を通して、少なくとも十以上の貴族の弱みを握ったと思う。

でも、手紙が最近のものに近づいてきたところで、私は面白いなんて言つてられなくなった。

いろいろんな手紙に、王家への不満や、それに対して騎士団がどう対応するのかがうよう

な文が並んでいたからだ。

そういえば以前、ミハイルに聞いたことがある。怠惰王の異名を持つ何代か前のダメな王様の時代に、騎士団がクーデターを起こそうとしたことがあると。

それは、王家の者が主導した企みだったという。その際、主導者は騎士団の力を強めようと、独立した会計機関として主計室を作った。

ところが、怠惰王は武力蜂起が起きる前に不慮の事故で失命した。王の座を継いだのは、クーデターをもくろんでいた王家の者。彼は騎士団に全幅の信頼を置いていたため、主計室はそのまま残されることとなった――

以来、王と騎士団長の信頼関係のもと、主計室は存続し続けているそうだ。もし騎士団がクーデターのために秘密裏に予算を使ったとしても、王はなかなか気づけないに違いない。

前世で暮らしていた日本は、平和な国だった。外国同士が戦争していることはあっても、それはニュースや新聞で見聞きする話で、現実味がなかった。

でもこの国は、違う。いつだって、内乱や戦争が起きる可能性があるのだ。

ミハイルの授業は、前世の歴史の授業と同じようにどこか遠い別の国の話として聞いていた私だけれど、その認識は間違っていたと思ひ知る。

手紙から立ち上るきな臭い匂いに、知らず身震いした。

そして一通の手紙に、私の目が留まる。

「シャナン王子の……留学？」

その文章の意味を理解するのに、少しの時間が必要だった。

慕わしいシャナン王子。でも、会いたくなくなってしまっから、近況はあまり知りたくなかった。

偶然読んだ手紙には、シャナン王子が最近こっそり他国に留学したという話書かれていた。嘘、だろうか？

そんな話は聞いたことがない。

いくら私が騎士団の下つ端の下つ端でも、自国の王太子が他国に留学するとなったら耳に入るはずだ。なのに、知らなかった。

でも、知らないからといって嘘だと一蹴できない。なぜなら、今まで読んだ手紙の中にも、王太子の体調を気遣うものや、公の場に出てこない彼に疑問を呈するものがあつたからだ。

王子が長く――ここ半年以上、民の前に姿を現していないのは確からしい。

私は混乱し、恐怖した。

本当にただ留学しているのなら、いい。

離れていても、いつか会える。その時、彼の役に立とうと思えば、がんばれるから。

けれど、王子が公に現れないのがもし別の理由だったとしたら？

体調を気遣われているということは、どこか悪いのだろうか。

重病にかかり、治療のために国外に出て、不調を隠すべく留学を装っている可能性もある。

思考はどんどん悪い方に転がっていった。

考えたくないと思ひながら、どうしてもある考えに辿り着く。

——まさか私のせい？ 私の治療を王子が無理に行ったから？

下民街出身のつまらない子供を助けたことで、王子が体調を崩す。

そんなバカなこと、あつていいはずがない。

手紙を持つ手が震えた。熱い吐息が、引き結んだ唇のはしから漏れる。

泣かない。泣く資格なんかない。

まずは、真偽を確かめるんだ。

情報で一番重要なのは正確性だと、ミハイルに習ったじゃないか。

自分に言い聞かせ、私はさらなる情報を得るために、手紙を読むことに没頭した。

それから何日も、副団長に無理を言っただけは本部に泊まりこんだ。

もちろん寮にある副団長の私室の掃除や、彼の食事の用意はきちんとこなした。洗濯はなんと、

洗濯女中達が請け負ってくれた。私のあわただしい様子に同情したのだろう。彼女達には、お礼に

またせっけんを贈ろう。

家事以外の時間はずっと本部に詰めて、手紙を読む。

一度読んだ手紙でも、目を皿のようにして読み返す。

些細なことでも、重大な情報に繋がるかもしれないからだ。

幸い、普段は口うるさい副団長も、それほど干渉して来なかった。手紙を読んでいる分には危険

もないと判断したのだろう。もしかしたら、大量の手紙を押しつけた負い目があったのかもしれない。

それでも、毎日夕食を終えると早く寝るように念押しされる。私は彼の目を盗んで、布団の内側

に光のペンタクルを描き、中にもぐって手紙を読み続けた。

そして半月が経ち黒月——十月に入った頃、手紙の整理の仕事がようやく終わった。

私は有益な情報を書類にまとめた副団長に伝えた。

すると、いらぬ手紙の処分を指示されたので、あとで役立ちそうな何通かを懐に入れ、残り

はすべて焼却する。

部屋から運び出される手紙を見ながら、副団長に想いを寄せる令嬢達にちよつと同情した。

そのあと、まとめた書類を副団長に渡し、報告する。

「こちらが手紙を受け取った記録と差出人の方の氏名一覧になります。手紙の内容や推測事項をまとめた書類はこの下です。重要度が高い順に記してありますので、少なくとも一枚目は絶対に目を通していただきたく存じます」

私は社会人モードの平坦な声で言った。副団長はいつもと変わらないクールな目で私を見る。

そして渡した書類に目を落とした。

彼がしばし沈黙したので、私は不安になってくる。

「何か？」

「いや。書類仕事は得意なようだな。見やすくまとめられている。他に経験のある業務は？」

仕事の評価は上々らしい。でも経験と言ったって、私はここでは六歳ですがね。まあ、前世ではいろいろあるけど。

私は思いきって考えていた言葉を口にした。



「はい。計算や会計処理が得意です」  
言ってから、胸がドキドキした。

まったくの嘘ではない。どっちも得意だった、前世では。でも、この世界での会計処理なんて知らない。得意どころか、できるかどうかもわからないのだ。なのに私がこう答えたのは、ある目的のためだ。

副団長は今、病に臥した主計官の会計処理も代行している。それを手伝え、副団長のそばにいる時間も増えるだろう。その間に、王子について何か情報が得られるかもしれない。

私は小さな希望に賭けた。

ついでに、この国の軍事を受け持つ騎士団のお金の流れを知れば、国内の、そして騎士団内のきな臭い動きについても少しは分かるだろう。

副団長やミハイルの様子を見ていれば、騎士団がクーデターを起こすことはないと思うけれど、念のためだ。別にスパイするわけじゃない。知った情報を口外するつもりもない。ただ、王子の役に立つべく、情報を集めるのだ。私は悪いことはしていない、と自分に言い聞かせた。

ゲイルやミハイルに若干の疾しさを覚えつつ、副団長の反応を待つ。

カノープスはしばらく考えこんだあと、口を開いた。

「では、明日から新しい仕事を任せよう。会計業務で頼みたいことがある。今日は休め」  
あっさりと言葉が叶いそうで、緊張がゆるむ。しかし、明日からなんて肩透かしだ。

「まだ昼ですよ？ 今からでも働けます」

食い下がる私に、副団長はため息をついた。

「顔色が悪い。寝不足だろう」

痛いところを突かれ、黙りこむ。

確かに、仕事に没頭して、ここ何日かは睡眠時間を少ししか取っていないかった。

それは早く仕事を終わらせたからではない。寝ようとしても、余計なことを考えてしまっ  
て眠れないのだ。ならば、仕事に集中して余計なことを考えないようにしたいというのが大きな理  
由だった。

「仕事熱心なのは結構だが、休むことも仕事のうちだ」

そう言っ副団長が私の顔に手を翳すと、まぶたがどんどん重くなってきた。

ワーカホリックのあなたには言われたくない。抵抗しようとかんばったのだけれど、結局それに  
抗いきることはできず意識を失ってしまう。

その直前、まるで抱き上げられたみたいな浮遊感を感じた。頬に当たる胸は、母のものとは違っ  
て硬かったような気がする。

約束通り次の日から、会計業務の手伝いはじまった。

騎士団本部の副団長の部屋に行くと、はじめに簡単な計算問題をいくつか出された。足し算にこ  
んなに緊張したのって、初めてかも。

ちなみにこの世界、日本で作られたゲームだけあって十進法の上にアラビア数字が使われている。

計算方法は前世と変わらないので、違和感がなくて非常に楽だ。

五桁<sup>けた</sup>までなら筆算するほどでもない。私は手元に架空<sup>かきう</sup>のそろばんをイメージして、ひよいひよい暗算していく。社会人になってからは計算機ばかり使っていたから、暗算に随分<sup>ずいぶん</sup>時間がかかっていたが、この世界ではステイシーの家で初等数学を教わった。その時に慣らしているので、だいぶ勘<sup>かん</sup>が戻ってきた。

すらすらといくつかの問題の答えを記したところで、カノープスに手元の紙をさらわれてしまう。

「……どうやって答えを出した？」

あれ？ ステイシーの家では何もつっこまねなかったよ？

「暗算です」

「この桁の合算ですか？ それに、その指の動きはなんだ？ 魔導でも使っているのか？」

質問攻めだ。それにしても……暗算しただけで魔導って。

今更だけど、ファンタジー世界だな。

「これは魔導ではなく、手元に道具があると仮定して計算しています」

「道具とは、算術用の道具か？」

「はい、現物がないのでうまく説明できませんけれど」

しばらく難しい顔で眉間<sup>みげん</sup>を揉<sup>も</sup>んでいた副団長は、やがて考えるのを諦<sup>あきら</sup>めたように重いため息をついた。

「……もういい、今は詳しく問わない。これらの計算はすべて正解だ。お前にこのレベルの計算を

任<sup>まか</sup>せても大丈夫だとわかれば充分だ。今はな」

なんだか、自分に言い聞かせてるような言い方だった。そんなに異常みたいな扱いをされると、地味に傷つくんですけど。

副団長は、自分の執務机に載っていた大量の書類を私用の小さなテーブルの上に置いて山を作り、はつきりと言<sup>はな</sup>い放<sup>はな</sup>った。

「ここに記されている計算をすべて検算しろ。間違いないように」

私はよくもまあここまで積み上げたなという量の書類を見て、心の底からパソコンが懐<sup>なつ</sup>かしくなかった。そして電卓も。

私はテーブル、副団長は執務机に向かい、黙々と作業に取り組みはじめる。

それにしても、今まで副団長はひとりでこの量の書類をこなしていたのだろうか？ しかも検算なんて下<sup>した</sup>っ端<sup>はな</sup>仕事を？

通常業務の上にこれもだなんて、忙しいはずだ。というか、完全にオーバーワークだと思う。

こんなことならもっと早く手伝うって申し出ればよかった。小さな下心は関係なしに。

積み上げられた書類は、いわゆる経費報告書。騎士団で購入した備品などが箇条書きに並んでいて、横に購入個数や金額、さらに紙の一番下にその合算が書かれていた。

それにしても……なんだこれ。

すごく雑な書類ばかりだ。字も汚くて読みづらいし、数字が抜けているところがいくつもある。

何枚か目を通した時点で、嫌な予感でいっぱいになる。

私は書類の山をもう一度見ると、ため息をついた。

陰謀だのなんだのの前に、伝票ぐらいちやんとまとめようよ。

結局、十枚ちよつと書類をチェックしただけで私はかなり気力を消耗してしまった。

なぜ上司に提出する書類に計算間違いや記入漏れなどがあるのか。それも一カ所ではなく大量に。

この世界の労働観念はどうなっているのだろうか。

真面目にミスゼロを徹底してた前世の自分が馬鹿らしくなる。

「副団長……間違っているところが、とてもたくさんあるのですが」

黙ってはいられなくて、副団長に抗議してみた。しかし彼は――

「それを検めるのがお前の仕事だ」

と、にべもない。

ああ、さいですか。そうですよね、この書類が不備だらけなのはとっくにご存知ですよね。

それからもう、無駄口を叩かずひたすら仕事に集中した。

――やがて夕刻の鐘が鳴る頃、私はようやく最後の書類に正しい解を書き入れた。

達成感で、んーっと伸びをする。

この体のいいところは、肩こりがないところだ。

ちらつと副団長に目を向けると、最初に腰かけた時とまったく同じ体勢で座っていた。

そういえば、今日一日ずっと副団長はここでデスクワークをしていた気がする。

この人は本当に騎士団所属か、と私は内心で呆れた。訓練はしなくていいのだろうか。もちろん、

一番呆れているのはこの書類を提出した人達に対してだけど。

「終わりました。カノープス様」

「ああ、ご苦勞――ちよつと待て、すべてか？」

「えーと、そういうご指示でしたよね？」

問われて、私は少し戸惑いがちに答える。

「途中の品目と数量も確認したか？」

ちゃんと仕事をしたか疑われているのか。気づいて、ちよつとムツとする。

「いたしました。それではわたくし、ご夕食の準備がありますので先に寮に戻っております。カノー

プス様はいつ頃お戻りになりますか？」

「あ、ああ……これが終わったら。二メニラほどで戻る」

二メニラ――一時間か。食事の準備にちょうどいい時間だ。

副団長の視線を背中を感じながら、私はきびきび歩く。

それにしても、がんばって夕食前に終わらせたのに、疑うなんてひどい話だ。

私は本部を出ると、早足で寮の食堂に向かった。

「騎士団の主計室って一体どうなってるの!？」

副団長の食事の給仕を終えた足で、私はミハイルの私室に駆けこんだ。

部屋に入った途端に叫んだ私の剣幕に、ミハイルは驚いたようだった。